

シリアのバスの出来事。

いつものように自転車をバスに乗せるをお願いをする。

今回もバス代は 50 シリアポンド(108 円)だが、自転車代としてさらに 50 シリアポンド、合計 100 シリアポンドだと言われ、まあそれが普通だろうと納得し、バスに乗り込む。

バスが出発し、添乗員がお金を集め始める。誰もが 50 シリアポンドを払っている。

私は、言われた通り 50 シリアポンド 2 枚を渡そうとする。とその時、近くにいた人が、

<近くにいた人> 『何でこの外国人からは、100 シリアポンドも取ろうとするんだ(と多分言っている)』

<添乗員> 『いや、この彼は自転車で旅をしているらしく、その自転車代だよ(想像)』

<近くにいた人> 『何? 自転車で? すごいじゃないか、お前(と私を見る)。そんな彼からお金を取るのか!(と怒り始める 想像)』

<回りの人> 『自転車! ソリヤすごい、大したもんだ、そうだよ金なんか取るなよ(想像)』

<添乗員> 『いや、そうは言ってもルールなんだから(想像)』

<私> 『おれもそう思うよ、全然問題ないよ、100 シリアポンド払うよ』

<近くにいた人> 『そんな杓子定規なこと言ってどうする。遠い異国から自転車で来てんだぞ(想像) おまけに相当なイケ面じゃないか(と言った気がする)』

<回りの人> 『そうだよそうだよ(がやがやと野次馬)』

<添乗員> 『でも金を集めるように言われてただけだなあ(想像)』

<近くにいた人> 『彼は、はるばるフィリピンから来てんだぞ、歓迎してやんなきゃ(フィリピンは聞こえた)』

<回りの人> 『いやいや、この顔はマレーシアだろ(マレーシアは聞こえた)』

<私> 『ちょっと待て、フィリピン??? マレーシア??? 俺、一応、日本人なんだけど』

<全員> 『何? お前は日本人なのか! おおっウェルカム』ここで一堂、歓迎の拍手。

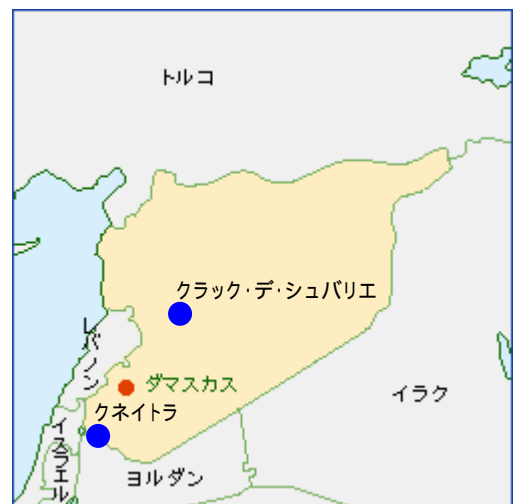
<添乗員> 『日本人ならOKさ(想像)、50 シリアポンドね』

<私> ちょっと複雑であるが、何だか嬉しい…。シリア人っていいな。シリアでは本当に日本人は受けがいいのであった。

クラック・デ・シュバリエ城

クラック・デ・シュバリエ城、ある著名な作家が『ここはまさにファンタジーの夢のお城である』と言ったり、アラビアのロレンスが『世界で最も美しい城だ』と言ったことで有名である。

十字軍の残した城の中でも保存状態の良いものだそうだ。城全体の雰囲気は、明らかにキリスト教的な雰囲気なのだが、その後支配したイスラム教徒によって内部が修飾されていて、キリスト教とイスラム教が同居している。



その異文化と異宗教の融合による味わい深い光景は、なーんてというような文化論はどうでもよいのである。

何で来たかという、ここは、「天空の城ラピュタ」のモデル地なんだそうだ。アニメになるくらいだからよっぽどすごいに違いない、と思った訳だ。

ホムスという、シリアの中心部の都市から小型バスで1時間。“行きのバス”はこのお城の真下まで来てくれる。

お城はちょっとした丘の上にズーンと建っていて結構でかい。そして入場料も150シリアポンド(324円)とシリアにしては結構高い。

さて映画のモデルの場所を見に来たと言いながら、実は「ラピュタ」を見ていない私は、どの辺がラピュタなのか良く分からなかったりする。

“「ラピュタ」を見ていない人は、「ドラクエ」だと思いきょう”とアドバイスをする人もいるらしいが、テレビゲームを老後の楽しみにとっておいている私はドラクエも知らない。

高台なので景色は良いのだが、ふーん、これが世界で一番美しい城なんかね、姫路城の方がきれいだねえ、というのが正直な感想である



クラック・デ・シュバリエという名のお城。遠くから見るときれいらしいのだが、中からは今一つだった。

ともかく、宮崎駿映画モデル地シリーズを3つ訪れたのでランキング。

モデル地と噂されている場所	その映画	コメント	勝手な評価
屋久島の太鼓岩 (日本)	もののけ姫	すっげー大自然の絶景。もう息を飲むほど。	9点
ドブロブニクの旧市街 (クロアチア)	魔女の宅急便	太陽に輝くオレンジ色の屋根、青い空、青いアドリア海は素敵	8点
クラック・デ・シュバリエ(シリア)	天空の城ラピュタ	丘の上に建っていて、爽やかな風が、天空の城って感じさせる。	5点
フンザ (パキスタン)	ナウシカ	(まだ行ってない)	

フランス人観光客が、でかい観光バスでどかーんと乗り付けてきたが、訪れた人はそれぐらいで、実はこの城、ほとんど人気がない。

そして“ 帰りのバス ” が無くなっちゃうことで有名なのであった。
乗合のバスが 1 台だけ客を待っている。バスに乗っているのは今のところ私一人。
そしてひたすら他の客を待つ。誰もお城に来ないんだから、帰る客もいない。
余りに誰も来ないので、うろうろと街を巡回。それでも誰もいない。
そして運転手『今日もう行かない』と言い放つ。噂通りだった…。

ダマスカスへ

でもヒッチすると停まってくれるのがシリア。とぼとぼと歩いていると、バスターミナルまで連れていってくれるトラックが停まってくれた。

難なくダマスカスに到着。

どこにバスが着いたのかわからないが、自転車でやたらと走ってようやくダマスカスの中心部にたどり着いた。

因みに、自転車でダマスカスを走るのは全くお勧めしない。シリアの首都ダマスカスは東南アジアよりも車社会なのであった。

人が良い国の首都だからか、安宿はどこも旅人で満室だ。夏休みは終わっているだろうに、ヨーロッパの人がむちゃくちゃ多い。



首都ダマスカスの街の様子。タクシーと車、そしてバスの渋滞がすごい。

安宿では大抵、ダブル シングル ドミトリーと値段が安くなっていく。しかしさらに【ルーフ】という最下層のベッドがあることをここで知った。

最下層と書いたが、値段が最も安いだけで、ベッドがあるのはルーフというだけに屋上である。屋上には簡単なひさしがあり、ベッドが並んでいるという程度。

雨が降れば、みんなでびしょびしょ、という事になるのだが、夏には雨が一滴も降らないので問題ないみたい。

こういう所だと、宿代は 200 円程度と安く、爽やかな風が吹くので好きだ、という人もいるが、爽やかな風は首都の喧燥をそのまま伝えて来てうるさいし、イスラム国の場合、朝方のコーランが鳴り響くと大抵の人は起きてしまう。そして朝方から斜めに照りつける太陽光線は、旅人を確実に早起きにしてしまうのだった(だから早々にルーフからドミトリーに引っ越す私)。

ダマスカスの街

イスラム教の国の中では、経済的に出遅れているシリアだが、意外な側面が幾つかあった。

シリアのガイドブックには大抵、『この国ではカードは使えません』と書いてある。

確かにアレppoではほとんど見かけなかった。しかしさすがに首都である。何とカードで買い物ができる店が多いだけでなく、ATM まであった。レートがどうなのか不安だが、まあ記念にキャッシング。

いつものようにマーケットへ行ってみる。

野菜の横に文房具、その横に果物、その横に洋服、と一貫性のないマーケットだったが、目の前に突然水槽が...

一瞬、鮮魚と思ったが、魚の小ささからすると、どうもペットの魚の様だ。

その隣の店には、テレビの大型画面の様なきれいな水槽が並んでいた。

シリアの家庭を見たことがないが、1メートル以上ある水槽を置く場所があるのだろうか。

ペットの魚を飼うのには、確かにあまりお金が掛からないのかもしれないが、最初的水槽代や熱帯魚代は、さすがに月給の何ヶ月分くらいはするのではないかと、と余計なことを考えてしまった。



鮮魚を売っているのかと思ったら、ペットの魚だった。貧乏でも魚を飼う余裕があるんだと感心してしまった。

どうもこの周辺にはたくさんのペットショップが並んでいる。

明らかに食用の鳥を扱っている店の横に、小鳥を扱う店がたくさんある。ここも一瞬、この鳥を食うのか、と思わなくないが、見るには良くても食べるには美味くなさそう、という小鳥。やはり飼うんだろうな。

もしかしてシリアってペットブーム？

焼き鳥屋から出る激しい煙が、小鳥達にも届いている。う~ん、ちょっと複雑。



ダマスカスで焼き鳥を焼いているオヤジ。毎日通ったから仲良しに。いつも煙もくもく。

新しい土地に着いたら、宿探し 酒屋探し 飯屋探し、というのは旅の定番である。

イスラム国であっても、パルミラのような観光地では簡単にビールが手に入る。しかし単なる首都の場合、なかなか酒屋を見つけるのが難しい。

イスラムの人は、『知らない』を簡単には言わない。必ず『そこを左、200メートル行ったら右』みたいな事を言うが、結構いい加減だったりするから困る。

トルコのように、スーパーマーケットには置いてあるかなと思いを聞くと、いろんな人があっちだこっちだと教えてくれるが、それらしき店は全くない。あったのは一畳ほどの敷地で営業している小さな商店。

シリアではこれをもってしてスーパーマーケットと呼んでいるのがわかった。これじゃ、買い物用の用を成さないばかりか、もちろんビールさえも売ってない。

ビール1本の為に街を放浪する。

結局このダマスカスの場合、30分も探してしまった。

ようやく見つけた酒屋は、レストランを兼ねているようで、二階では多くの人たちがビールを飲んでいました。

普通の喫茶店では、酒を飲まずに多いに盛り上がっているのに、アラブのビアレストランだと、何故か静かに飲んでいるのが不思議である。

どうでも良いが、アラブ人も結構飲んでるぞ。今回ここで飲んだのはアレppoで飲んだ AI SHARK BEER とは違うブランド。まだマシだったがでもまずい。ラベルの日付を見ると、一昨日作ったことになっていた。賞味期限は3ヶ月。でもそのラベルの下にはもう1枚ラベルがあった。果たして同時に2重にはってしまったのか、それともいったん賞味期限が切れたのか、よく分からない...



ダマスカスの酒屋さんの壁。ジョニーウオーカーなど見た事のある酒がずらり。イスラム教徒も結構飲んでいる。

ダマスカスには輸入のビールもたくさんあった。500ミリリットルの缶で75シリアポンド(162円である)。シリア産が50シリアポンド(108円)でも、やっぱりこっちを選んじゃうな。物価の安いシリアである。ビールを3本も買うと、宿代(200シリアポンド(431円))を抜いて、その日の一番高い買い物になったりする。

ビールを飲んで、ダマスカスの街をぶらぶらしていると、旧市街の城壁内では何やらコンサートの予感。

大弾幕に書かれている文字は良く分からないが、人の集まり具合が半端じゃない。

聞くと、サウジアラビア、ヨルダン、イラクなどたくさんの国から観客が来ているらしい。

もしかして、有名なコンサートなのかも、ラッキー。



旧市街地の城塞で行われた音楽祭の様子。入場無料ながら、結構本格的な物で、お客も1000人近い。

城内に入るには、厳しいチェックを受ける。X線探知器なんて高級なものはないので、警察官総出で警備に当たっている。

やり方が面白い。ゲートにずらっと30人の警察官が左右に並ぶ。観客はその間をゆっくり歩く。小さい頃遊んだ、『ロンドン橋落ちた』みたいだ。

警察官は一人一人の顔を覚えるように、10センチ近くまで観客の顔をじろじろ見る。まるでチンピラのガン付けである。そして最後にボディチェック。

会場ではもう直ぐにでも始まりそうな雰囲気。そして回りの観客に聞いても、もう始まるはずと

言っている。にもかかわらず、結局ずるずると2時間も待ってしまった。実にアラブ的だ。そして始まったのはやっぱりアラブ音楽。15分で退席した。もうバスの中で嫌なほど聞いていたので...

安そうなレストランに入ってみる。

同じ席で、美味そうにご飯とトマトのスープを食べている初老の男性。同じものを注文すると、『ほお、こんなものが好きなのか』と(実はメニューが分からないだけである)。その人は英語が出来た。クエート人だった。クエートからダマスカスに旅行に来ているのだそうだ。

何でよりによってダマスカスなのか、理由を聞いてもさっぱりわからなかったが、小さい国に住んでいると、外へ出たくなるのかもしれない。

そう言えば、同じ宿にもクエート人がいたっけ。クエート人旅行者って多いんだな。

貧乏そうに見えたのか(その通りだけど)、私の分の勘定まで払ってくれて、忙しそうに出ていった。何だか恐縮。でもクエートが好きになった。

戦争被災地クネイトラ

戦争と平和。

中東にいと強く感じるテーマである。

この日、朝早くタクシーに乗ってクエート大使館へ行く。昨日クエート人に飯をおごってもらったからではなく、クネイトラという場所へ行く為の許可証をもらう為だ。

ガイドブックには『クネイトラに行くにはクエート大使館近くにある(内務省の)小さなプレハブで許可証をもらう』何て書いてある。

クネイトラとは、ゴラン高原にある元シリアの街で、第4次中東戦争の後、1974年にイスラエルが撤退する際に、徹底的に爆撃された場所だ。

イスラエルの残虐行為を歴史に残す為、アサド前大統領が、この街を復興することなく残しているのだそうだ。

このクネイトラを含むゴラン高原の一部は現在、国連の監視下で非武装地帯となっていて、許可証がなければ立ち入ることは出来ない。

シリアの地図にはシリア領として書かれているが、別の地図を見ると、確かに中立地帯としてどこにも属していない。

そのクネイトラに入る許可証をもらいたいのだが.....、クエート大使館に来てみると、案の定、どこにも“小さなプレハブ”なんてものはありゃしない。

地球の歩き方は、相変わらずアホである(何度も騙される私もアホだけど)。住所を書け住所を。大使館なんて引越すケースがけっこうあるのに....。クエート大使館、すごく遠かったのに....。

しかし、テーマは戦争と平和である。

簡単には行かないだろう。仕方がない。

再びタクシーで、クネイトラ行きの申請所を探す。運ちゃんが自信をもってここだといったところも間違っていて、ダマスカス中をうろうろした。

ようやく申請所を見つけて申請。20分後、許可証をもらう。

もう既に午後になっていたのに、今日か明日か、という選択を迫られたので“今日”と答えてしまい、そのままクネイトラに行く事になった。

テーマは戦争と平和である。平和なうちに行くに限る。

タクシーにのり、バスに乗り、乗合バスに乗る。だんだんと登っていく道。これがかの有名なゴラン高原らしい。たしか、日本赤軍もキャンプを張っていたような....

途中何度か検問があった。何とかという街で降りて、軍の人間が許可証をチェックし、台帳に控えている。

ピリリ、とした雰囲気がある。さすがテーマは戦争と平和である。

ようやくダマスカスから2時間弱でクネイトラに到着。

クネイトラへ行く途中のバスは満席だったが、終着のクネイトラまで行ったのは私一人だった(そりゃそうだ、もはや誰も住んでいないのだから)。

たった一人の観光客の為に、シリアの警察官が一人付き添いとなりクネイトラの廃墟を一緒に歩く。

クネイトラという街は、ゴラン高原にある国連監視団が駐屯している地域である。ひっきりなしにUNと書いた車が通るが、住民は一人もいない。



ただただ廃墟と化しているクネイトラの街。銃撃の後も生々しく残っている。向こうの山はイスラエル領土。

直ぐ向こうの山はイスラエルだそうだ。隣の山には風力発電の風車が何機も回っている。あれもイスラエルの設備らしい。

この警察官は英語が話せない。一生懸命に説明してくれるが何を言っているのかわからない。でも確実に伝わってくる。殺し合い、殺戮、破壊、憎しみ、陰惨、絶望という言葉がふさわしい光景なのだ。

モスクも住居も搭も原形はあるものの、ただただイスラエルの爆撃によって破壊し尽くされている。イスラエル軍の残虐行為を世に伝える為に、前アサド大統領が残したかった気持ちが分かる気がする。



クネイトラでも最も激しい戦いがあったという病院跡地。壁には無数の弾痕。中は無茶苦茶に破壊されている。

延々と破壊された建物が瓦礫の山になっている。

ガイド役の警察官が、じゃあホスピタルへ行こう、と連れていってくれたところは、マシンガンの弾痕があまりに痛々しい場所だった。

もちろん中は瓦礫の山。何を狙ったのか、どうしたらこれだけ弾痕を残せるのかという壁跡は、何とも言えない気分させられる。

弾痕触ってみても、何だかすごすぎて実感が湧かない。

テレビでも見ている気分もしくはゲーム感覚のイメージだ。本当にここで何かが起こったとは思えないような異空間という感じ。犬の鳴き声だけが空しく響いていた。

ここに来る途中、ジャイカの人たちが、UNのPKO部隊に所属する日本人につれられて見学に来ていた。日本の自衛隊もこの地に来ているという事を初めて知った。

彼らは車で移動。私は徒歩。乗せてくれりゃーいいのに。

しかしテーマは戦争と平和である。楽をしてはいけない。

見学は30分で終わったが、何だか強い印象の為か、長い時間そこにいたような気がする。

この感覚、ポーランドのアウシュビッツと似ている。

戦争と平和、なかなか重たい。

この夜、衝撃的なシーンを振り返り一人しんみりしていると、トルコからシリアへ来るバスで一緒だったドイツ人の女性(21才、美人)が私と同じドミトリーの部屋に来た。この宿は男女一緒の部屋なのだ。

彼女とは既に仲良しだったので、彼女もホッとしているようである。

とそんな時、彼女がズボンを脱いでパンツ姿に。そのままドミトリーの部屋を歩き回っている。

テーマは戦争と平和である。平和っていいなあ。

つづく